

EE30 竹村 周大
指導教員 山館 順

1. 緒言

本研究は平成 21 年度卒、山岸直幸の卒業研究である「南関東中世銭貨の成分分析」を引き継いだものである。

本研究の狙いは東京都福生市と神奈川県厚木市出土の中世銭貨のものと成分比率の比較により、中世当時の銭貨の流通経路や在地経済を考究する上での手掛かりを見出そうとするものである。また、前回の研究課題であった日野市や多摩ニュータウン以外での多摩川中流域出土銭貨の分析も並行して進める形になった。

2. 研究のアプローチ

今年度の研究では実際に各地域で出土された 15～16 世紀の古銭の分析を行った。福生市郷土資料室・神奈川県立埋蔵文化財センターより計 40 枚を貸与していただいた。

40 枚の銭貨を蛍光 X 線分析装置にて成分分析し、今回研究の 2 地域でのデータ比較を行った。

3. 結果

40 枚の古銭の成分分析を行った。先ず以下に今回測定に使用した古銭を、測定 No. と合わせて表にして示す。

表 1. 40 枚の古銭の測定 No. と古銭名

測定 No.	古銭名	測定 No.	古銭名
11Ca01	洪武通宝	11Ea01	洪武通宝
11Ca02	洪武通宝	11Ea02	洪武通宝
11Ca03	洪武通宝	11Ea03	洪武通宝
11Ca04	洪武通宝	11Ea04	洪武通宝
11Ca05	洪武通宝	11Ea05	洪武通宝
11Ca06	洪武通宝	11Ea06	洪武通宝
11Ca07	洪武通宝	11Ea07	洪武通宝
11Ca08	洪武通宝	11Ea08	洪武通宝
11Ca09	洪武通宝	11Ea09	洪武通宝
11Ca10	洪武通宝	11Ea10	洪武通宝
11Ca11	洪武通宝	11Ea11	洪武通宝
11Ca12	洪武通宝	11Ea12	洪武通宝
11Cb01	永楽通宝	11Ea13	洪武通宝
11Cb02	永楽通宝	11Ea14	洪武通宝
11Cb03	永楽通宝	11Eb01	永楽通宝
11Cb04	永楽通宝	11Eb02	永楽通宝
11Cb05	永楽通宝	11Ec01	朝鮮通宝
11Cd01	宣徳通宝	11Ec02	朝鮮通宝
11Cd02	宣徳通宝	11Ed01	宣徳通宝
11Cc01	朝鮮通宝	11Ed02	宣徳通宝

E: 福生市熊川遺跡出土

C: 厚木市上依知遺跡出土

a: 洪武通宝 b: 永楽通宝

c: 朝鮮通宝 d: 宣徳通宝

40 枚の古銭を成分分析し、熊川遺跡と上依知遺跡出土銭貨の成分比率の一例を下表に示した。

表 2. 測定 No. 11Ea03 のデータ(mass%)・熊川遺跡

Cu	Sn	Pb	Fe	Cr
61.6	9.32	26.0	2.14	0.913

表 3. 測定 No. 11Ca06 のデータ(mass%)・上依知遺跡

Cu	Sn	Pb	Fe
61.4	9.67	26.9	2.03

表 4. 測定 No. 11Ea14 のデータ(mass%)・熊川遺跡

Cu	Sn	Pb	Fe
74.7	8.18	16.4	0.176

表 5. 測定 No. 11Ca08 のデータ(mass%)・上依知遺跡

Cu	Sn	Pb	Fe
74.3	8.78	16.1	0.739

表 6. 測定 No. 11Ea11 のデータ(mass%)・熊川遺跡

Cu	Sn	Pb	Fe	Zn
78.2	6.67	11.1	3.07	0.975

4. 結論

表 2 と表 3、表 4 と表 5 の成分比率はそれぞれ熊川遺跡と上依知遺跡出土の銭貨を比較しており、どちらにおいても非常に成分比率が類似している。そのため、各組み合わせの銭貨は比較対象地域間において交易があった可能性が考えられる。またこの 2 つの遺跡は川岸から数百 m 以内に位置するため、熊川遺跡は多摩川、上依知遺跡は相模川水系であるが、両水系間で何らかの交易があった可能性を指摘できる。

福生市地域出土の銭貨については、表 4 や表 6 のように Cu の含有率が 70% 前後であって、比較的質の高いものが多く、成分比が比較的近い値に集中している。質の高い銭貨の割合が多いことから、諸方面との銭貨交換が活発であったというよりむしろ、地域内に鑄造施設があった可能性が考えられ、また良質な銭貨を商人等が意図的に手元に残し、質の低いものを外部との流通に回していた可能性も指摘したい。

5. 今後の発展

今回の研究で福生市と厚木市という、南北の位置関係の地域から、ほぼ同じ成分比率である銭貨を見つける事が出来た。今後は分析資料の数を増やし、上の結論において述べた推測をより信頼性のあるものにし、中世後期における関東地方南部の銭貨の流通実態解明を目指したい。

6. 参考文献

- [1] 福生市郷土資料室, “福生市の中世大量埋蔵銭 特別展示 図録,” PP.30-35, 月年(Mar.1996)
[2] 櫻木晋一, “貨幣考古学序説,” PP.19-32, 月年(Jan.2009)